
第二章

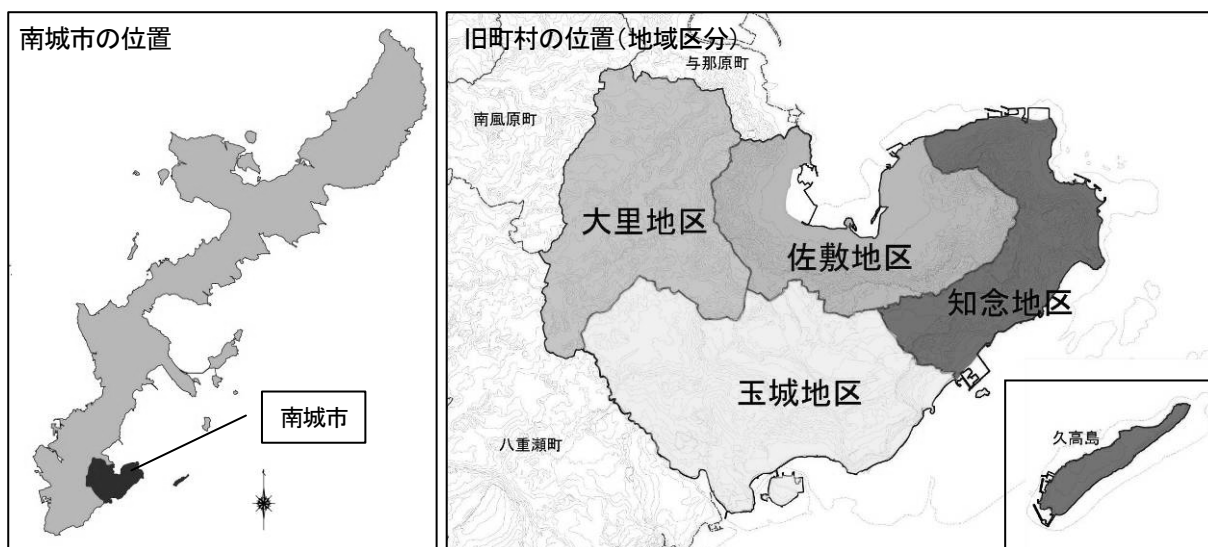
南城市の歴史文化の特徴

(1) 市勢の概要

1) 位置・地勢

南城市は平成18年1月1日に1町3村（佐敷町・知念村・玉城村・大里村）の合併により誕生した新しい市である。沖縄本島南部の東海岸、県都那覇市から南東へ約12kmに位置し、静穏な中城湾と太平洋に面している。東西18km、南北8kmの広がりを持ち、面積は49.70km²を持つ市域は本島南部において最も大きな規模を持ち、北は与那原町、西は南風原町、八重瀬町にそれぞれ接している。西側を除く三方が海岸線に接し、東部の海岸側は比較的平地が多く、海岸線に沿って集落が形成され、南部の海岸側は、台地上の地形に集落が形成されている。

東部及び南部の海岸部の後方から西部地域にかけては、なだらかな傾斜地の中に耕地が点在している部分と比較的急峻な岩石の断崖となって連なっている部分があり、それらの頂上は比較的広い台地で、ゴルフ場などの施設があるほか、原野、耕地が広がっている。頂上から北部にかけては、豊かな緑に被われた丘陵地が海岸部にかけて広がっており、南城市の特徴的な地域景観を形成している。北部の丘陵地から海岸部及び西部にかけては比較的平坦な地形が広がり、市街地や集落が形成されている。離島である久高島は、隆起サンゴ礁で平坦な地形をなし、島の南西端に集落がある。山林・湧水・河川・海など自然資源が豊富であり、また優良農地が広がり、自然的土地利用の色合いが強い地域といえる。



2) 人口・世帯数

南城市（旧町村）の人口は昭和50年以降徐々に増加し、平成17年には39,651人、平成22年4月には40,733人となっている。一方、世帯数についても順次増加しており、平成17年には11,561世帯、平成22年には14,144世帯となっている。世帯数は昭和50年の6,408世帯に比べ、2.2倍の伸び率になっていることから、核家族化の影響を受けているとみられる。

平成22年4月の人口・世帯数の構成は、大きい順に大里地区（12,462人、4,131世帯）、佐敷地区（11,365人、4,025世帯）、玉城地区（11,480人、3,986世帯）、知念地区（5,426人、2,002世帯）となっている。

3) 土地利用

南城市の土地利用は、約3割を農地が占めており、農振法に基づく農用地区域も広い範囲で指定されている。また、市内を通る道路網としては、国道331号が市の外周を形成し、県道86号線、県道137号線、県道48号線などが主要な道路を構成している。起伏があるという地形条件もあり、市内を南北方向に結ぶ道路網が弱く、新たな幹線道路として南部東道路が計画されている。

都市計画区域は、これまで佐敷地区及び大里地区が那覇広域都市計画区域の一部として指定されており、市域の半分以上を占めるそれ以外の区域では計画的な土地利用コントロールが困難な状況にあった。そこで市内の一体的な土地利用規制を図るため、平成22年8月10日より那覇広域都市計画区域から離脱し、市全域が南城市単独の都市計画区域となり、風致地区や特定用途制限地域などの新制度によるまちづくりがスタートしたばかりである。また、平成21年4月には景観法に基づく景観行政団体となっており、景観資源の保全や地域資源をいかした風景づくりの取り組みが今後図られる。

図 土地利用と道路網の状況

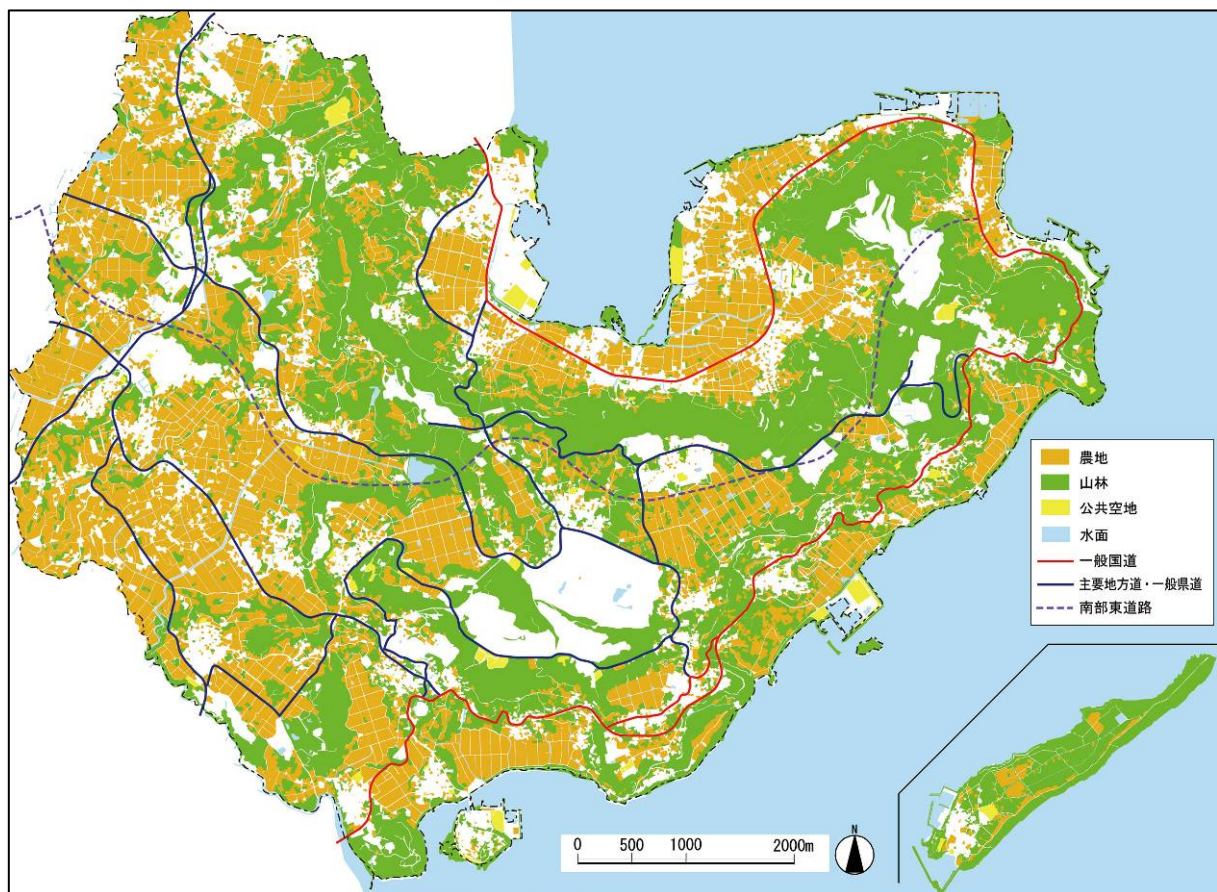
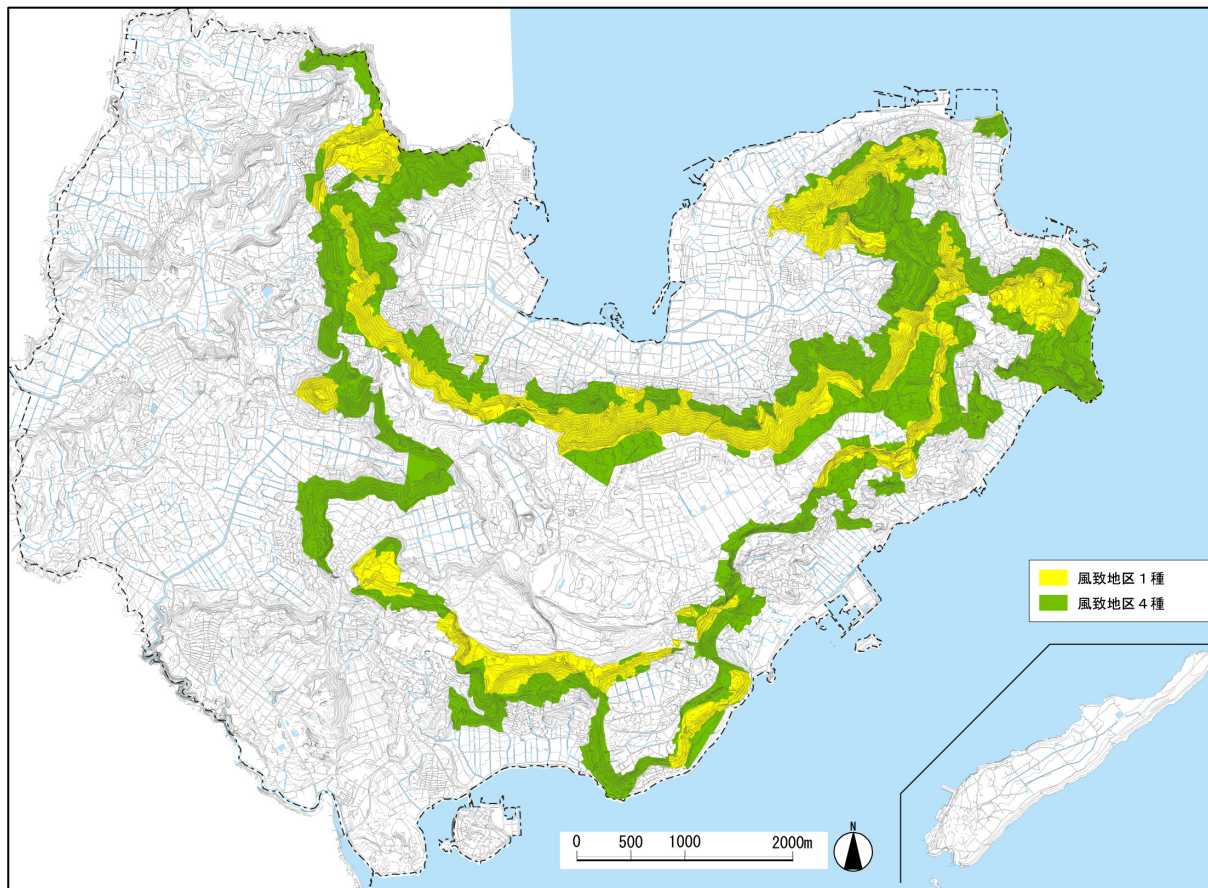


図 風致地区指定状況



4)産業

南城市では農業が基幹産業となっており、主要野菜出荷量で県内トップ5に入った品目は8品目にも及び、特にサヤインゲンとオクラは県内出荷1位である。漁業は沿岸漁業が主体となっており、近年はモズクの養殖が盛んである。特産品には、伝統菓子や健康食品、海産物、工芸品などがあり、ウコンやノニなどの沖縄の薬草を加工した健康食品の産地として知られている。

美しい海岸景観や貴重なさんご礁の海を持つ臨海地域には、あざまサンサンビーチ、新原ビーチ、知念岬公園などが点在し、またシュガーホールや玉泉洞、糸数アブチラガマ、ウェルネスリゾート沖縄休暇センターのほか、眺望に優れたカフェや喫茶店も多く、観光資源にも恵まれている。さらに、市民の温厚で飾らない気質は親切で親しみやすい人情を生み、国内外との交流を促進するうえで大きな魅力となっている。

市では現在、恵まれた地域資源、人々のネットワークを活かし、「いやしと健康」をテーマに南城市ならではの体験滞在交流型の観光振興と健康づくり事業に取り組んでいる。

(2) 歴史文化の概要

1) 歴史文化の概要

沖縄県は大小約160の島々からなる島嶼県であり、島ごとに異なった地史を持っている。豊かな海に囲まれ、海岸には珊瑚礁が発達し、様々な地形や地質がみられる。また、亜熱帯性気候に属する自然環境のため、貴重で珍しい動植物が生息している。

沖縄県の多様な文化遺産には、ふたつの大きな特徴がある。ひとつの側面は、琉球王国が諸外国との交流の中で培ってきた王朝文化と称される文化遺産である。沖縄県は琉球王国として歴史的に独自の道を歩んできた背景があり、日本本土をはじめ、中国や朝鮮、東南アジア諸国との交易活動を行い、組踊や古典芸能、空手、織細で華麗な染織や漆工芸品などの工芸品などに代表される文化的に独特で洗練された要素がみられる。

もうひとつの側面は人々の暮らしや営みに関わるものである。赤瓦家屋やフクギ並木、御嶽や神アサギなどの拝所、井泉、石獅子や亀甲墓など沖縄の伝統的集落を構成する要素があり、日本本土の「木の文化」に対して「石の文化」と形容できるほど、グスクや石垣、墓、石畳道など石造建造物が発達している。また、様々な年中行事が行われてきており、ハーリーや綱引き、棒踊り、奉納芸能、エイサーや村踊りなど、集落ごとに独特の行事や豊富な伝統芸能が伝えられている。沖縄戦の痕跡（戦跡文化財）も、地上戦を経験した沖縄にしかない負の遺産である。

このような沖縄県全体の背景のもと、南城市は以下に示す歴史文化の様相に特徴づけられる地域である。

① 様々なグスクの集積

グスクには考古学や歴史学、地理学の立場から様々な定義があり、過去に“グスク論争”を巻き起こしてきたほどだが、信仰上の聖域や集落を内包しつつも防御の機能を持った城塞的な空間と位置づけられる。農耕が定着し、生産力が上がって人口も増え、地域共同体が拡大していくに伴ってグスクがつくられるようになり、グスク的遺構から小型グスク（2千平方メートル未満、単郭構成）、大型グスク（2千平方メートル以上、複郭構成）へと発展していくのが南城市では確認できる。グスクを中心に文化遺産が分布する環境は、南城市の歴史文化を理解する格好の材料である。



知念グスク



島添大里グスク

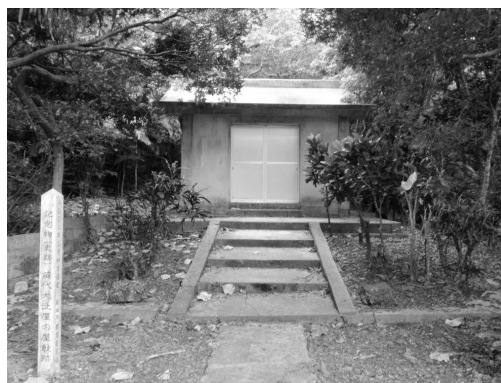
② 国家の聖域・地域の聖域

沖縄には御嶽や殿、火神、拝井泉などが、祖霊神やニライカナイを祀る聖域として集落を中心に分布しており、南城市においても共通する特徴である。さらに南城市には、斎場御嶽をはじめとする琉球開びやくに由来する聖域があり、王国の国家儀礼の地として祀られた。また尚巴志などの歴史的偉人の旧跡が集落の御

嶽として祀られるなど、様々な歴史のルーツを物語が豊富に分布していることが特徴である。



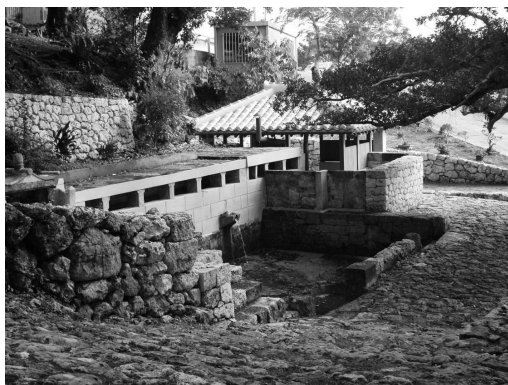
浜川御嶽



苗代大比屋の屋敷跡

③生活を支える水源

石灰岩が発達した南城市は湧水が豊富な場所であり、市内各地には井泉（樋川・井戸）が分布している。こうした水は、人々の生活を支える一方、農耕や人生サイクルと深く関係し、子供の誕生や新年の行事にも初水が利用されるなど拝みの対象となっている。



仲村渠樋川



糸数樋川

④海への信仰や生業

市域の三方向が海であり、珊瑚礁や遠浅のイノー（礁湖）に囲まれ、白砂が広がる海岸には特徴的な植物群落が生育している。沖縄には海上他界のニライカナイ信仰があるが、南城市にはニライカナイから渡海したアマミキヨ伝承の地が県内でも多数分布している地である。久高島や奥武島といった島を持ち、特徴的な漁撈習俗も発達している。



ヤハラヅカサ



奥武島のイカ干し

⑤伝統的な祭祀や行事

沖縄には王国の国家的聖域や史跡を巡礼する行事があり、そのうち首里城から南城市の位置する東四間切への巡礼を東御廻り（アガリウマーイ）という。従来はアマミキヨ神話や琉球王国の聖域を巡礼する行事だったが、地域や門中ごとに再解釈されて数々のコースが展開されている。また各集落では、伝統的な祭祀行事や伝統芸能が盛んに行われ、地域の歴史や伝承、生業などの習俗を再生産する役割を果たしている。



拝所への祈願



知名のヌーパレー

⑥豊富な埋蔵文化財

市域の丘陵部にある琉球石灰岩洞穴や海岸近くからは貝塚時代の遺跡や人骨、化石が、集落周辺からはグスク時代から琉球王国時代にかけての遺跡やグスク、御嶽が分布し、当時の生活文化をうかがわせる遺物が確認できる。南城市は昔から水が豊富だったため、農業生産性が高かった地域であることがわかる。



斎場御嶽から出土した金製勾玉

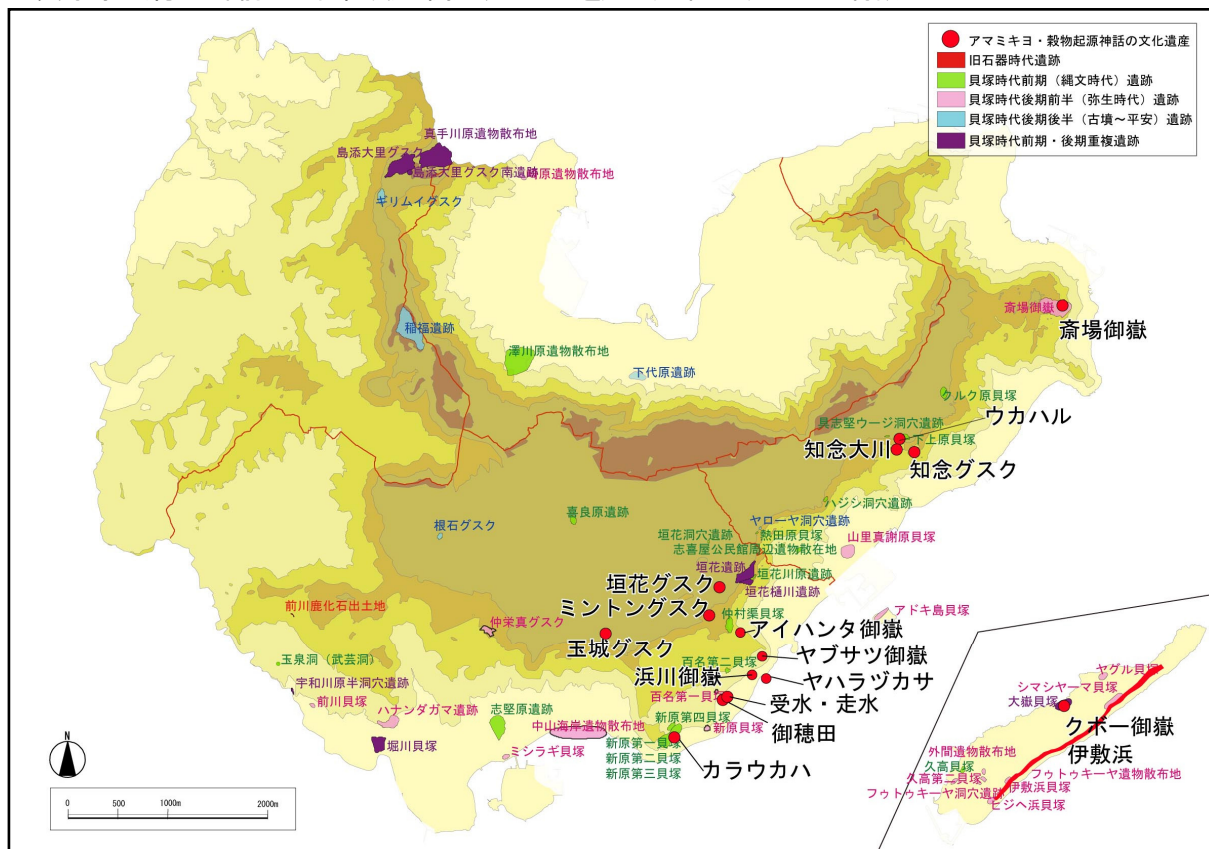


新原貝塚

2)時代別の歴史文化の特徴

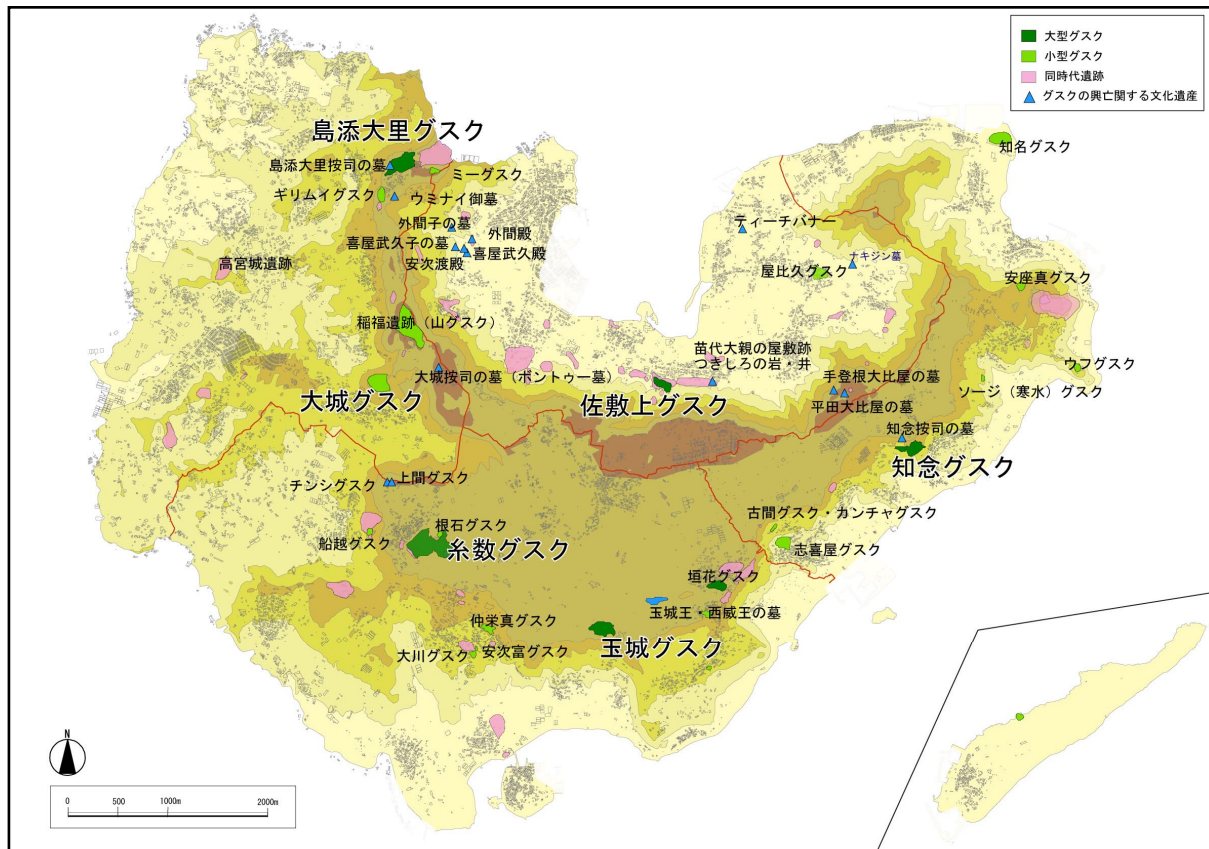
南城市の歴史文化事象及び文化遺産を時代別に整理すると、次ページ以下のような特徴及び分布状況になる。

■貝塚時代(約1万年前～12世紀頃)に関連する文化遺産の分布と歴史文化の特徴



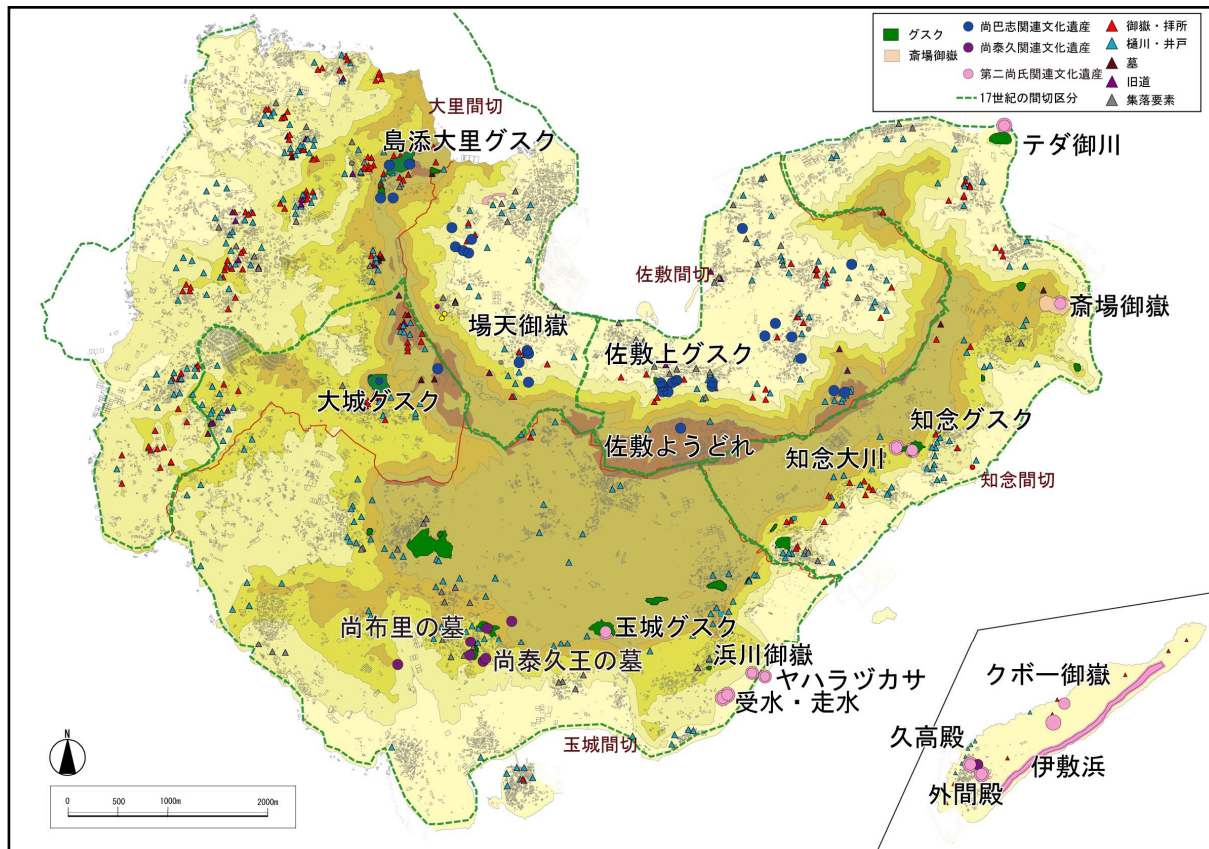
- ・沖縄の旧石器時代の遺跡は、玉城字前川の琉球石灰岩壁から約2万年前と想定される鹿の化石が発見されている。
- ・沖縄の貝塚時代は約1万年前から開始されると考えられており、縄文時代にあたる貝塚時代前期、弥生時代にあたる貝塚時代後期前半、古墳時代から平安時代にあたる貝塚時代後期後半の3期に分けられる。
- ・貝塚時代前期の遺跡は丘陵上の台地や台地縁辺部の崖下などに立地するのが特徴で、島添大里グスク（大里字大里）、垣花遺跡（玉城字垣花）、新原貝塚（玉城字新原）、下上原貝塚（知念字知念）などの17カ所が確認されている。
- ・沖縄貝塚時代後期前半の遺跡は、前期に比べると海岸線近くに下りてきており、海岸砂丘地から新原貝塚やミシラギ貝塚が確認されている。そのほかの遺跡は河川沿いまたは丘陵台地上にある。
- ・貝塚時代後期後半は堀川貝塚を除く9カ所の遺跡が丘陵上に所在しており、ヤローヤ洞穴遺跡、根石グスク、垣花遺跡、下代原遺跡、稲福遺跡、島添大里グスク、島添大里グスク南遺跡、真手川原遺跡、ギリムイグスクなどがみられる。貝塚時代の終焉頃に流通した無文の土器が出土している。
- ・これらの遺跡は次の時代のグスクが立地する場所と重複しており、このことから貝塚時代後期後半の社会から次のグスク時代に継続されてきたことがわかる。
- ・アマミキヨ神話や穀物起源神話に関わる史跡は、知念から玉城字垣花・百名周辺に集中している。これらの地域は湧き水が豊富で島尻でも数少ない水田地帯であり、貝塚時代においても遺跡が確認されていることから、人々の定住と農業生産力を背景に神話や伝承が発生したものと考えられる。

■グスク時代(12世紀頃～15世紀前半)に関連する文化遺産の分布と歴史文化の特徴



- グスク時代になると、前の時代に始まった農耕が定着し、人口が増えはじめる。人々は天然の湧水を利用して水田を開き、その水系の集落（マキヨ）が地縁的な共同体となる。中南部は畑作が中心だったが、南城市では水稻耕作が可能だったことは特筆される。
- 鉄器利用によって生産性が拡大したことで、共同体を束ねる首長（按司）が台頭し、集落や聖域を内包しながら防御性をもつグスクを構えるようになる。南城市はグスクや関連遺跡が多い地域だが、上記のように農業生産力が高く、人口が多かったことが背景にあると考えられる。
- 南城市では大型グスク、小型グスクが丘陵上に立地し、各グスクを中心に同時代の遺跡が分布していることが特徴である。大型グスクに隣接して、領主だった按司の墓やその家族の墓が分布している。
- そのなかでも、玉城グスク、知念グスク、糸数グスク、大城グスク、島添大里グスク、佐敷上グスクなどの大型グスクは、グスク間の興亡を繰り返す広げ、当時の政治的文化的中心地だったと考えられる。
- グスクを中心に集落が分布しており、この時代の遺跡群は、17世紀前半に成立する間切制度の間切やシマの単位に対応しており、その母体となったと考えられる。

■琉球王国時代(1429～1879年)に関連する文化遺産の分布と歴史文化の特徴



- 1429年、佐敷上グスクを拠点とした尚巴志は、浦添にあった中山を平定した後、拠点を首里城に移して第一尚氏王統を樹立することにより、琉球王国が誕生した。以降、1469年に第二尚氏王統に王権が移行するが、1879年までは独立王国となった。
- 琉球王国時代の地域社会は貢納を目的とした米、粟、豆、砂糖の農業生産を行っており、集落と耕地は密接な関係を持ち、農作業や祭祀、冠婚葬祭の扶助もシマ単位で行われ、間切・シマ制度（後の間切・ムラ制度）も成立した。
- 17世紀には大里の大城が玉城間切に所属しており、グスク時代の地域区分をもとに間切の境界が決められたのではないかと推測される。17～18世紀にかけて大里間切・佐敷間切・玉城間切の境界で所管換えが行われ、こうして確定された間切区分は王国末期まで継承された。
- 18世紀には新しい集落（近世集落）の村立てや、王府の指導による集落移動も行われた。
- グスク内の御嶽や集落の起源の屋敷が拝所となり、年中祭祀などに巡拝されるようになる。集落には殿や火の神、樋川・井戸、墓、集落要素（クムイ、石獅子、土帝君など）が分布する。
- 大型グスクの所在した大里、佐敷、知念、玉城は間切番所が設置され、間切の中心として街道の整備が行われた。知念グスク、玉城グスクではグスク内に間切番所が置かれた（玉城は後に富里へ移動）。
- 尚巴志以後、二度の事件（志魯・布里の乱、護佐丸・阿麻和利の乱）が起こり、玉城字富里や当山には尚泰久の一族に由来するグスクや墓が分布した。
- 琉球開びやく神話や穀物起源神話に登場する久高島を含めた知念や玉城は、琉球王国の国家儀礼の場とされ、琉球国王の行幸（18世紀より代理）や聞得大君の御新下りが行われた。世界遺産である斎場御嶽は単に聖域として重要なだけでなく、国家儀礼の場としての記憶も内包した史的空間である。

- 17

(3)文化遺産の特徴

1)文化遺産の分類

南城市の指定文化財は、世界遺産に登録されている斎場御嶽をはじめ、国指定及び登録文化財12件、県指定文化財9件、市指定文化財59件となっている。そのうち最も指定が多い史跡（23件）のうち、国・県指定5件、市町村指定4件がグスクにあたる。

表 南城市の指定文化財の件数

指定・登録の文化財類型		国	県	市	合計	主な文化財
有形文化財	重要文化財（建造物）	1	2	3	6	仲村渠樋川、大城按司の墓
	美術工芸品	1	—	2	3	沖縄県斎場御嶽出土品
無形文化財	芸能	—	—	3	3	天人、棒術
	工芸技術	—	—	—	0	
民俗文化財	無形	—	—	12	12	長者の大主
	有形	—	—	14	14	シーサー、美里井、土帝君
記念物	史跡	4	3	16	23	斎場御嶽、知念城跡、玉城城跡、糸数城跡、垣花城跡、ミントングスク、佐敷ようどれ
	名勝	—	1	—	1	斎場御嶽
	天然記念物	—	3	9	12	伊敷浜の海岸植物群落、カペールの海岸植物群落、富祖崎海岸のハマジンチョウ群落
記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財		1	—	—	1	久高島の漁撈習俗
登録文化財（建造物）		5	—	—	5	おきなわワールド内家屋
合計		12	9	59	80	

沖縄県の文化遺産の一般的な性質や形態別に再分類し、南城市内の文化遺産の分布状況を整理したのが次表である。南城市の特徴は次のように整理できる。

- 沖縄県及び奄美諸島には周辺諸島には341件のグスク及びグスク関連遺産があるとされるが、南城市にはその1割にあたる29件ものグスクが分布しており、その突出したグスクの数は最も大きな特徴であり、南城市の歴史文化の鍵と考えられる。また、グスクに関わる歴史的人物の墓や史跡、伝承が多数ある。
- 全体的に御嶽・拝所、樋川・井戸の個体数が多い。これらは県内に比較的共通する事項だが、南城市の文化遺産は、集落単位の資源だけでなく、斎場御嶽に代表される国家儀礼に関わる御嶽、穀物起源の神話や伝承に由来する湧水など、王国の歴史と深く結びついた文化遺産が多数みられる。
- 御嶽・拝所、樋川・井戸の他にも、各集落には石垣、並木、石獅子などが分布し、祭祀や芸能などが活発に行われている。特に集落単位で伝統芸能をよく受け継いでおり、青年会が主体的に芸能継承に取り組んでいるのが特徴である。
- 南城市には、沖縄本島南部に特有な琉球石灰岩を母体とした地形や珊瑚礁の発達した海岸があり、なかでも久高島などの海岸植物群落や断崖岩場の植物群など特有の植生をみることができる。
- 琉球石灰岩洞穴や海岸近くからは貝塚時代の遺跡、グスクや御嶽、集落周辺からはグスク時代から琉球王国時代における遺跡が分布し、当時の生活文化をうかがわせる遺物が確認できる。特に斎場御嶽からは、金製勾玉や中国青磁器・銭貨が出土しており、祭祀用の遺物として重要視されている。

表 南城市の文化遺産タイプ別の件数

分類	内容	国指定	県指定	市指定	未指定	合計
グスク	グスク、グスク跡	3	2	4	20	29
御嶽・拝所	御嶽、殿、火神、風水等の拝所	1	0	10	308	319
樋川・井戸	カー、共同井戸、拝井泉、樋川、歴史的水路	1	0	10	380	391
旧道	宿道、歴史の道	0	0	0	7	7
集落要素	石畳、石垣、並木、チンマーサー、石獅子、古民家、スーヅ	5	0	4	65	74
墓	神御墓(礼拝墓)、門中墓、歴史的人物の墓	0	2	2	35	39
埋蔵文化財	貝塚、住居跡、生産遺跡など各種遺跡・遺構(城跡は除く)、遺物散布地、出土地	1	0	1	119	121
戦跡・近代化遺産	戦争遺跡、近代化遺産、慰霊碑・忠魂碑	0	0	1	149	150
他の史跡・建造物	上記に含まれない史跡や建造物	0	0	2	21	23
自然環境	動物、植物(巨木、群落等)、地質	0	3	7	8	18
伝統祭祀	村落祭祀、儀礼・行事	0	0	1	10	11
芸能	組踊、村芝居、民謡、舞踊	0	0	14	5	19
生産技術	農耕習俗、漁撈習俗、農地、漁場	1	0	0	2	3
美術工芸品	絵画、彫刻、工芸品、書跡、典籍	0	0	0	2	2
古文書・考古資料	古文書、考古資料(出土品)、歴史資料	0	0	2	2	4
工芸技術	陶芸、染織、漆芸、金工、木工	0	0	0	0	0
文芸・民話	琉歌、祭祀歌謡、民話、昔話	0	0	0	1	1
合計		12	7	58	1,134	1,211

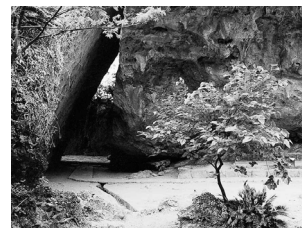
※上記の表に示した数は、現在確認されているものであり、今後増える可能性もある。

上表に示されるグスクや御嶽・拝所、樋川・井戸、伝統集落、海岸地形など市内に分布する文化遺産は、沖縄全域に共通する歴史文化でもあるが、なかでも20頁以降に整理する文化遺産は、歴史的な出来事に裏打ちされており、南城市を代表的する文化遺産だといえるだろう。

2) 代表的な文化遺産の紹介

① 斎場御嶽

琉球開びやく神話にも登場する琉球王国最高の御嶽で、聞得大君の就任儀礼「御新下り」が行われた。現在でも東御廻り（アガリウマーイ）で参拝されるなど信仰の対象となっている。世界遺産に登録されている。



斎場御嶽

② 佐敷上グスク

三山を統一し琉球王国を興した尚巴志が居城したグスクである。グスク構造に斜面の崩落を防ぐための土塁的石列が確認され、石積みも見つかっている。グスク内及び周辺には尚巴志やその家族に由来する史跡が点在し、東御廻りなどでも参拝されている。



佐敷上グスク

③ 島添大里グスク

東大里グスクとも称し、島添大里按司によって増改築されたグスクである。当時は東四間切（大里・佐敷・知念・玉城）を支配下に置くほどの勢力を誇ったグスクで、中国との貿易も盛んだったとされる。グスク周辺には「城村（ぐすくむら）」としての当時の集落や、物見台として形成されたミーグスクなどが分布する。



島添大里グスク

④ 大城グスク

玉城王の子である大城按司が築城したと伝わるグスクで、大城集落の北側後方の丘に位置する。14世紀頃の城主は大城按司真武で、のちの首里名門の始祖にあたる人物である。彼は島添大里按司に滅ぼされたが、グスク内及び周辺には大城按司に由来する史跡や地名が残る。大城按司の墓は別名ボーントゥ墓と呼ばれる特徴的な形態を持っている。



大城グスク

⑤ 知念グスク

琉球開びやくの御嶽のひとつとされ、琉球国王や聞得大君の行幸が行われたグスクである。自然石を積んだ古グスクと切石あいかた積みの新グスクの二つの郭で構成されている。グスク時代以後は知念間切番所や学校として活用されており、中世から近代まで様々な史跡が城内外で見られることが特徴である。



知念グスク

⑥ 玉城グスク

琉球開びやくの御嶽のひとつとされ、英祖王統の玉城王の居城だったと伝えられる。旱魃時には琉球国王が行幸し、雨乞いが行われた。三山統一時代以前の伝説が多数あり、それがグスクの神秘性をより特徴づけている。



玉城グスク

⑦糸数グスク

玉城王の子である糸数按司が築城したと伝わるグスクである。野面積みを基調としながら、切石積みの部分で補強し、南北に巨大な物見の砦を据え付けられた城壁が残されている。グスクに隣接して、同時代の遺跡が多数分布する。



糸数グスク

⑧垣花と仲村渠の樋川

垣花と仲村渠は特に水量の豊富な地域である。仲村渠樋川は19世紀初頭には生活用水として使われており、大正から昭和にかけて貯水槽や石畳道、共同風呂が造られ、現在も往時のとおり復元整備されている。垣花樋川は風光明媚な場所に立地する樋川である。両樋川とも人々の憩いの場として市内外から多くの人が訪れている。



垣花樋川

⑨藪薩の浦原一帯

百名海岸の後背地一帯を藪薩の浦原と呼ぶ。アマミキヨが東の海から来訪した場所として、ヤハラヅカサ、浜川御嶽、さらに稲作発祥地の受水・走水があり、琉球開びやくや稲作発祥の地として一帯が聖域化し、東御廻りの主要な拝所となっている。



受水・走水

⑩久高島

琉球開びやく神話や五穀発祥神話に登場する地で、琉球王国の重要な島として、1667年までは国王の行幸が行われた。年間30を超える集落祭祀をはじめ、土地所有制度や漁撈習俗など、特徴的な習慣が残されている。伊敷浜やカペール御嶽など海岸域には発達した植物群落が見られる。



久高島の祭祀

⑪奥武島

沖縄本島と橋でつながる漁業の島である。王国時代に漂着した唐船を救助したことに由来する観音堂は、島の航海安全の象徴となっている。旧5月4日の海神祭のハーリーやトビイカを干す風景など、海と暮らす漁業集落として特徴的な資源が残されている。



観音堂

⑫玉泉洞(武芸洞)

南城市内では、武芸洞から約3000年前（縄文時代）の石棺墓と人骨が発見された。二重構造の石棺墓形式が見つかったのは、県内では初めてのことであり、先史時代の埋葬文化や沖縄と奄美との関係を明らかにする貴重な発見として注目されている。



武芸洞

3) 文化遺産分布の空間イメージ(例示)

文化遺産、特に有形資源は空間構成要素のひとつであり、その土地の空間構造に大きく影響を受けて立地、形状、面積、性質などが定められるため、南城市の空間構造を把握しておく必要があるが、それは以下のよう
に整理できる。

- 隆起石灰岩の平坦な台地とその辺縁をふちどる石灰岩堤（崖地）、及び海岸付近の低地が空間の大きな基軸をなしている。石灰岩堤の縁は市域を大きく取り巻くようなスケールで連続して分布しており、緑豊かな市域を形成している。
- 発達した地下水盆により豊かな湧水に恵まれた地であり、この水脈を頼って集落が立地された。集落の背後には水源でもある森、緑地があり、集落やその住民を包み込んで護る「腰当（クサテ）」の森としてとらえられている。河川はあまり発達していない。
- 腰当の森には御嶽が分布する。御嶽は古くはその集落の葬所だったと考えられ、祖霊神や守護神が鎮座すると認識されてきており、聖地であると同時に年中行事や儀礼の場ともなる。また、一部の地域では丘陵地と急峻な断崖が連なる地形を利用してグスクが形成されており、それを背にした麓斜面（南向きが多い）にかけて集落が広がっている。
- 集落はグスクや御嶽に近い方から前面に向かって発展したと考えられ、このクシ（後）の区域には村や門中の宗家（根屋、元家等）、火の神や殿などの拝所が分布する。ほとんどが集居集落であり、古琉球時代は不規則な家屋配置だったが、近世に碁盤目状の配置に改編・追加されたところがある。また、一部では首里王府の指導により集落移動が行われたケースもある。
- 集落の構成要素として、集落道、古民家（旧家）、石垣や石畳、並木・巨木、拝所、樋川・井戸、石獅子、土帝君、広場・馬場、歴史的な道などがある。集落に隣接して田畑が広がり、地割跡やハル石などの文化遺産がみられる。
- 海岸低地にも集落が分布している。海岸植生をいかした防潮・防風林を育て田畑を守り、サンゴ礁に囲まれた内海（イノー）を賢く利用して半農半漁の生活を送ってきた。ハーリー（爬龍船）や漁撈習俗、航海神など独特の文化遺産がみられる。
- 海の向こうはニライカナイと認識され、海上他界、東方浄土の思想を育んできた。ニライカナイを遥拝するためのウトゥーシ（御通し）と呼ばれる拝所が各所に設けられている。

文化遺産は人々の暮らしとの関わり合いから生まれた資源であることが多く、集落域を中心に分布する傾向にある。そこで南城市における集落を核とした空間構造の特徴を整理し、どのように文化遺産が分布しているのかをイメージしておきたい。次頁では、南城市に特徴的に見出せる、①台地・斜面状の集落構造と、②海岸低地の集落構造をイメージ化した図面を添付し、それぞれの特徴と分布状況を略述している。

また、南城市の歴史文化の鍵となるグスクについても同様に空間構造を概念化する（③）。

①台地・斜面上の集落構造と文化遺産分布



- 石灰岩台地上に集落が立地し、集落を擁護する森林（腰当の森）、畑地が隣接する。
- 集落域には集落道、古民家（旧家）、石垣や石畳、並木・巨木、拝所、樋川・井戸、石獅子、土帝君、広場・馬場などが分布する。
- 森林地には御嶽や井泉などが分布する。またグスクが立地する場合がある。
- 畑地には印部石などが分布する。
- 区画が不規則である集落が多く、小道（スージ）が発達している。古琉球からの古い形を残していると考えられる。
- 国道などの幹線が集落域を貫通するまたは隣接することが多い。
- 台地上に立地するため見晴らしがよい。
- 森林地では墓地が増えている。

②海岸低地の集落構造と文化遺産分布



- 沿岸の低地に集落が立地し、集落の後方に腰当の森が、前方に畑地が隣接し、さらに前方に海岸が広がる。
- 集落域には集落道、古民家（旧家）、石垣や石畳、並木・巨木、拝所、樋川・井戸、石獅子、土帝君、広場・馬場などが分布する。
- 森林地には御嶽や井泉などが分布する。グスクが立地する場合がある。
- 畑地には印部石などが分布する。①に比べると畑地の規模が大きい。
- 海にはイノー（礁湖）が広がり、海岸では特徴的な植物群落などを形成する。
- 区画が規則的なところが比較的多い。
- 離島集落もこの分類に含まれる。
- 森林地では墓地が増えている。

③グスクの空間構造と文化遺産分布



- 石灰岩台地上の森林地などにグスクが立地し、石垣などで砦が築かれている。2千平方メートル以上の大型グスクは複数の郭を持ち、中心となる郭には石門、正殿跡や庭、倉庫などの遺構が残されている。
- グスクは本来、御嶽や集落だった場所が城塞化したとの説もあり、それに関連するように御嶽や集落跡がグスク内に分布する例もある。
- 大型グスク周辺には、按司（城主）がグスクに移る以前の古いグスク（小型グスク）や物見や出城として増築された新しいグスクも分布する。台地上に立地するため、見晴らしがよい。
- 按司（城主）やその家族の墓（御墓）や関連する史跡が拝所として分布する。

- グスク内部及び周辺には御嶽・拝所、樋川・井戸が分布しており、グスク時代以降は拝所として拝まれるようになる。
- 隣接する集落には集落祭祀の中核となるノロ殿内や根屋、御嶽・拝所が立地する。ノロ殿内では集落祭祀だけでなく、複数集落や間切単位の祭祀も行われる。
- グスク時代以後は、グスク内部や近隣に間切番所が設置され、グスクの立地した集落が地方行政の中心村となる場合が多い。そのためグスク周辺には宿道などの歴史的な幹線道路が通過する。
- グスク内部や丘陵の洞穴に沖縄戦で利用された砲台や壕跡が残され、戦争遺跡としての傷跡が確認できる場合がある。